

鉛色の巨人になったが、楽しんでいこうと思います！

バサカバサカ！

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

女神アクアにヘラクレスの能力を頼んだらヘラクレスにされた！

しかもバーサーカー仕様で言葉をしゃべることができない！

けど、ジェスチャーでなんとかできるのでなるようになるさ！

そんなお気楽な主人公が喋れない故に起こる勘違いをそのままに、このすばの世界で生活していく物語！

原作よりもオリジナルな話が多くなるかもしれない。

ヘラクレスに憑依しているので、苦手な人はブラウザバック推奨です。

目次

鉛色の巨人と銀髪の盗賊

1

本日のお仕事

13

アクセルの巨人と幸運の女神

24

鉛色の巨人と銀髪の盗賊

いやー、異世界転生！

異世界転生だぜ！！

女神アクア様にF a t eのヘラクレスの能力を頼んで転生しましたよ！！

異世界についた俺だが、なにやら周りの物が小さいのだ。

そう、何を隠そう。

俺はヘラクレスの能力ではなく、F a t eのヘラクレスになっただのだ！

身長250何とか！

体重300kg越えだった気がする！

全身筋肉の塊で、上半身は裸だ！

下半身には鎧なのか服なのかわからない腰巻がある！

そして、俺の身の丈ほどある岩を削りだした彼の様な斧剣だ！

これはどうみてもヘラクレスで間違いない！！

ゲームで何度も見た姿と同じだしな！

なんでヘラクレスの体になってしまったのかはわからないが、そんなことはどうだっていい！

重要な事じゃない！

男の憧れである筋肉である！

高身長である！高身長である！！

チビだった俺がどんなに欲しても手に入れることができなかった

身長が今ここに！

ヘラクレスの体と言う事は身体能力やスキルなどきつとそのまま

である！

確認はできないけど！

魔王討伐だって簡単にできそうだ！

流石にすぐにはいかないけど！

それにしても周りにいる皆が小さいぜ！

これが身長の高い奴のみが見れる世界って奴か！！

興奮して辺りを見渡していると、何やら呆れた様な視線を感じた。
つておお!!

視線を感じちゃったよ!?

前世でも視線を感じるなんてことなかったよ!!

おまけに気配までわかるぞ!!

この視線の主は俺に近づいてきている!!

あえてそちらに顔を向けずに気配だけを感じ取る。

これだけを言葉にすると、今の俺は達人の様に見えるな!

「ねえ君！ ちよつといいかな?」

そんなことを考えていたら、視線の主が声を掛けてきた。

そこで俺が振り返ると俺は思わず呻いた。

おしい!

銀髪だが、髪が長くないし、目も赤くない!

イリヤポジにはなれないな!

つてそうじゃないだろ。

思わず思考が変な方向に走った。

「■■■■?」

とりあえず返事をすると思って、なんですか?と言おうとしたら口からはうめき声の様な音しか出なかった。

「……………」

「? えつと……………」

どうやら姿だけでなく声帯までバーサーカー仕様らしい。

ちくしょう!

虎聖杯の時はしゃべってたじゃん!

あの渋くてダンディボイスで喋りたかった!!

まあ、言っても仕方ない。

27でちびだった俺が、高身長になりたいと言っくらい言っても仕方ない。

仕方ないので、俺は自分の喉を指して、首を横に振るジェスチャーをした。

「喉……………もしかして、しゃべれないの?」

少女の言葉に俺は頷いた。

すると少女は頭に手を当てて小さく呟いた。

「……アクア先輩……一体何をやらかしたんですか……」

おや？

かなり小さな声だったが、今この少女の口から、俺を転生させてくれた女神さまの名前が出てきた。

しかも先輩？

疑問に思っても言葉に出来ないので、適当に考察しておこう。

あと、俺を見上げながらしゃべるのは大変そうなので、しゃがんでおこう。

しゃげむと同時に、少女が顔を上げた。

「えっと、ごめんね。私はクリス。君は日本から来た人で間違いない？」

クリスの言葉に驚きつつも頷いた。

クリスは、女神アクア様を先輩と呼んでいた。

ということは、クリスは神様、もしくは神様見習いと言った所だろうか？

異世界なら神様になる手段もありそうだし。

「良かった。女神エリス様から君を助ける様に神託を受けてね。君がまともに生活できるようにサポートしなさいって」

女神エリス様は女神なのだろうか？

頭の悪い考えが浮かんだ。

態々信徒でもない俺を助けるためにクリスを遣わしてくれたなんて！

喋れないと言う事実が今しがたわかったので、凄く助かります!!

女神エリス様に感謝の祈りを捧げておこう！

女神アクア様には転生させてくれた感謝を祈りを！

教会とかあるかな？

どちらの教会にもいくぜ俺は！

とりあえず、この場では手を合わせて祈りを捧げておこう。

天まで届け！我が祈り！

【ありがとうございます】

今までの人生でかなり真剣に祈った。

目を開けると、何故かクリスが慈愛の瞳で俺を見ていた。

何故に？

思わず首を傾げると、クリスは可笑しそうに笑った。

「なんでもないよ」

なんでもないらしい。

そんなこんなで、クリスにこの世界の事を色々教えてもらった。

会話できないので、頷いたり首を傾げたりするだけだったが、クリスは楽しそうに教えてくれた。

一通り教えてもらった後は、クリスの提案で服屋に行くことになった。

「流石にその姿だとね、服を買いに……いや、注文しにいかうか！」

とはクリスの言葉である。

買いに行くじゃなくて、注文に行くと言うあたり、ヘラクレレスサイズの服は扱ってないようだ。

異世界なら巨人くらい居るんじゃないの？

そんなことを思いながら服屋へ。

会話ができない俺に代わって服の注文から代金の支払いまでしてくれたクリスには、頭が上がらない。

ちなみに、サイズの測定は服屋の外で行った。

服屋の前で鉛色の巨人をメジャーで測る様は、異様な雰囲気が出

ていた事だろう。

クリスのお蔭で衣食住の衣はどうにかなった。

上着とズボンと下着を各5つつつ。

靴とスリッパを一つずつ特注した。

しめて六万エリス。

全部クリス持ちである。

これは早々に冒険者ギルドで働いてお金を返さねば！

とりあえず、クリスには誠心誠意頭を下げて感謝を表しておいた。頭を下げられたクリスには、すぐに頭を上げる様に乞われた。

この恩は何倍にもして返すよ！

さて場所は変わって冒険者ギルド

幸い大きい作りになっていて、俺が入っても大丈夫だった。

クリスの案内の元、冒険者カードを作る魔道具に手をかざしてカードが完成した。

流星は英霊最強の一角と言うべきか、ステータスがぶっ飛んでいった。

知力以外の全ステータスが人間の限界を超えていた。

知力は平均よりも高い程度だった。

中身が俺だからね、仕方ないね。

脳筋此処に極まれり！

ヘラクレスの体じゃなければ、ステータスも普通だったんだろうなー。

流星ヘラクレス、パネエ！

ちなみに、種族の所には半神半人と書いてあった。

完全に前世の俺はどこかへ飛んでますね。

べつにいいけど（震え声）

そして、異世界おなじみの職業！！

ヘラクレスならキャスター以外なら何でもなれると言われていたからな！

実に楽しみだったぜ！

何故か職業適性が【狂戦士】しかありませんでした（笑）

もうこれは女神アクア様が脳筋で行きなさいと言っていますね。

間違いない。

受付の人に若干怯えられながらも狂戦士となった俺。

最初からスキルポイントと言うものもあつたので、クリスに頼んでスキルを選んでもらっている。

カードが小さすぎて自分でスキルを選ぶ事ができないからな！

仕方ないよね！

迷惑かけてごめんねクリス！

そんな俺の内心をクリスは全く察する事なく、スキルを選んでスクロールしていく。

随分ハイテク? なカードですね。

「規格外だとは思っていたけど、その想像すら簡単に超えていくね、君は。なにこのポイントの多さ。四桁のスキルポイントなんて見た事も聞いた事もないんだけど」

呆れたように笑いながら、クリスはどんどんスキルを選んでいく。そんなクリスに笑顔を浮かべて、サムズアップしておく。

ヘラクレスだからね!

そんな俺を見て、クリスはため息をついた。

「正直、狂戦士のスキル全部とれるよこれ。宴会芸スキルはいらないだろうけど」

宴会芸スキル!?

一体どんなスキルがあるのだろうか!?

クリスの後ろに回り込んで、文字を眺める。

花鳥風月って何ぞ?

腹踊りとか、その辺はわかるけども。

花鳥風月って何ぞ?

名前がカッコいいけど、なんぞ?

大切な事なので二度連想しました。

クリスの肩を指で軽く叩く。

「うん? どうしたの?」

でかい指で花鳥風月が書かれている辺りを指さす。

俺の指だとスキル三つくらい指さしちゃうね。

「これ? 違う? あ、もしかして【花鳥風月】?」

クリスの言葉に頷く。

クリスは何故か可笑しそうに笑いながら、花鳥風月について教えてくれた。

どうやらこれも宴会芸スキルらしい。

名前からは全く想像できない。

「まあ、君のポイントならこれも余裕で取れるけど、取る?」

「……………」

とりあえず頷いておいた。

ヘラクレスが宴会芸……たいがーころしあむならありえそう。

あとホロウとか。

やったことないけど。

「その威圧感のある巨体で宴会芸……凄いシユールな絵になりそう……」

クリスがぼそりと呟いた。

聞こえてますよー、俺もそう思うけど。

そうして、しばらくしてようやくスキルを選び終わったらしい。

「はい、これでおしまい」

最後に取得ボタンをおして、俺の魂にスキルが刻まれた。

……宴会芸、水出せるじゃん！

飲めるかな？

飲めるなら水持たなくてよくなったぜ！

魔力とかも異常に多いし！

さて、冒険者登録したからにはクエストを受けねば！

なにより、今の俺は借金を背負っている身！

クリスは良いと言うかもしれないが、お金の貸し借りはしっかりとしなければ!!

「それじゃ、まだお昼だしクエスト行ってみる？」

「……………」

少し気合を入れて頷きながら返事したら、周りが静まり返った。

「やる気があるのは良い事だけど、気を付けてね？」

すいませんでした。

苦笑しながら注意してくるクリスと周りの人たちに頭を下げた。

クリスが定番だと言うのでジャンアントトードの討伐を受けた。

三日で5匹。

常時発注依頼なので、一杯狩ったらその分報酬は上乘せされるらしい。

「わあー！ 速い！ 高い！ 凄いね!!」

「■■■■■■■■■■！」

現在俺はクリスを肩に乗せて走っている。

ちやんと落とさないように気を使っているが、それでも馬より早い。

あと、はしやぐクリスが可愛い。

平原を走っていると、気配を感じて立ち止まった。

「近くにジャイアントトードが居るね。っていうか、今私がスキルで感知するより先に気が付かなかった？」

よくわかりません。

とりあえず首を傾げておくと、クリスも首を傾げながらも肩から飛び降りた。

「反応は土の中、眠ってるみたいだね」

土の中なら真上から刺したらどうにかならないだろうか。

このでかい斧剣とヘラクレスのステータスならやれると思うんだけど。

そんなことを思っていると、クリスの頭にピコン！と電球が見えた気がした。

発想が古いな俺……

「ねえ、君！ さっき取得した【雄叫び】のスキルを使ってみたらどうかな？ 自分の攻撃力を上げるスキルだけど、クルセイダーの【デコイ】に似た効果もあるから、土の中から出て来るんじゃないかな？」なるほど、それは良い考えだ。

俺はクリスに頷いて、少し距離を取った。

「じゃあ、私は【潜伏】で隠れてるね。何かあればすぐに助けるから！ まあ、必要なさそうだけど」

そう言つて、クリスが潜伏のスキルを使うと自然に混じつてわからなくなつた。

すごいな、潜伏。

英霊の気配センサーからも隠れるの？

まあ、それはさておき。

ならやっつてやれないことはない!!

今度は軽く雄叫びを上げて、俺はカエルへと接近した。

カエルが何かをする前に叩き潰す!

斧剣を両手で持って上段から振り下ろした。

大きなカエルが真つ二つになった。

……そういえば、なんか剣を振っただけでエミヤに傷つけたりしてましたね。

片手で振ってあれだから、両手で振ったら斬撃が飛ぶのだろうか?

そんなことを思いながら、更に斧剣を振る。

振る振る振る振る振る振る振って振って振りまくる!

気分は射殺す百頭!

所で宝具つてつかえるんかね?

そんな風に思考を横へ逸らしつつ、真つ二つにされてグロテスクな見た目になったカエルから目を逸らす。

気が付けば、カエルを一掃していた。

あれ、なんか何もさせずに終わったんだけど。

クリスを振り返ると、引き攣った笑みを浮かべていた。

あ、これやりすぎだな。

「今までいろんな人たちを見てきたけど、君なら絶対に魔王を倒せるって確信を持って言えるよ」

そんなことを言うクリスにどういう顔をすれば良いかわからず、とにかく笑って置くことにした。

帰る前に後二匹だけカエルを討伐して、討伐数25匹にした。

そんなこんなで、早くも転生して最初のクエストが終わった。

クエスト報酬50万エリス

カエル買取額12万5000エリス

やったぜ。

借金返済できるぜ。

「やったね! 君の力ならもっと難しいクエストでも簡単にできるよ」

そう言ってくれたクリスに笑みを浮かべて、握手するように手を出

す。

クリスも笑みを浮かべて、手を重ねてくれた。

「おつかれさま！」

「■■■■■！」

いいねえ、こういうの！

その後、お金を渡そうとすると拒否するクリスに何とかお金を渡して、借金を返済した！

そうして、クリスと一緒に晩酌を終えて宿へ向かったのだが……

「君が大きすぎたね」

「……■■■」

そう、俺の体が大きすぎて、宿の人に断られた。

お金があつても止まる所がないのである。

馬小屋もあるが、一部屋が小さい。

それなら野宿した方がマシである。

色々の特注する必要があるなあ。

今日は寝るところがないから仕方ない。

野宿するか。

焚火も簡単にできるし、町の外に行くか。

とりあえずクリスはもう帰さないとな。

俺はクリスを指さして、宿を指さす。

「そしたら君はどこで寝るのさっ？」

俺は外壁のある方を指さした。

すると、クリスは顔をしかめた。

「もしかして、外で寝るつもり？」

その言葉に俺は頷いた。

英雄の肉体なら問題ないのである。

信じる、つていうつもりで自分の胸をドンツと叩くと、ため息をつかれた。

解せぬ。

「仕方ないなあ……少し待ってて」

「？」

クリスは宿の中に入ると、何やら荷物を持って出てきた。
もしかして、一緒に外で寝るつもりだろうか？

「私も行くよ」

やっぱりそのつもりだったようだ。

だがしかし、それは流石に承諾できない。

首を横に振ってクリスを持ち上げて宿へと戻す。

「ちよ!? そんな簡単に追いつかないでよ!!」

駄目だったら駄目である。

女の子はちゃんと宿で寝なさい。

「君が追い返しても、後で探すよ!? 暗い夜道を彷徨い歩くよ! それでもいいの!?!」

クリスの言葉に固まる。

確かに後から来られるより一緒に移動した方が良さだろう。

荷物だって俺が持てば、安全だ。

ぬう……どうすればいいのか。

「私は本気だからね!」

クリスは引くつもりはなさそうだ。

少し考えて妙案が浮かんだ。

馬小屋を借りて馬小屋の外で寝ればいいのか？

少なくとも外でキャンプするよりは安全である。

と言う事で、クリスを持ち上げたまま馬小屋へと向かった。

道中でクリスに色々と言われたが、翌日からはちゃんと宿で寝てほしいものである。

そうして、俺の冒険一日目を終えたのだった。

本日のお仕事

冒険家業もいいけど、町の為に何かすることで仲良くなろう作戦！
を実行する事になった。

特に俺は会話ができないので、町のみんなの好感度を上げておこう
と言うクリスの助言である。

「というわけで、今日はアクセルの町の為に出来ることをやっていこ
う！」

「■■■■■！」

オー！とばかりに声を上げて、手を突き上げる。

室内でやったら天井が突き抜けるが、今は屋外だから問題ない！

「いい返事だね！ それじゃ、クエストみにいこっか！」

俺はクリスに頷いて、クエスト掲示板へと歩み寄る。

今はクエストを見ている人たちがいるので、大人しくその後ろに
座って待つ。

座って待っているのは、俺が大きすぎて座るなりしやがむなりしな
いと依頼が見えないから仕方ないのだ。

少し待っていると、ふと前にいたパーティの女の子と目が合った。

「ひっ!？」

「ん？ どうしたリーン……うおっ!! デカツ!!」

「なにが、ってデカツ!? こわっ!!」

まあ、ヘラクレスが後ろで胡坐かいて見てたら怖いよね。

とりあえず、怖くないよと意思表示をするために、笑みを浮かべて
サムズアップする。

「「お、おう」「う、うん」

四人とも呆けた顔で同じようにサムズアップしてくれた。

やはり笑顔は万国共通のコミュニケーション手段なのだ。

「な、なんか見た目と行動のイメージが違う……」

「ああ、と言うかこいつ……いや、彼は人間なのか？」

「巨人族なんて聞いた事ねーぞ」

「……でかい上に凄い筋肉だな。座ってるのに、俺達よりでかいぞ」

四人でこそそと話しているが、全部聞こえてますよー。
ヘラクレスは耳も良いようだ。

とりあえず、退屈なので俺の後ろにいたクリスを驚掴み！

「わっ!? いきなりなにをするのさ?」

しかしクリスつてちっちゃいな。

掌で腰を掴めるぞ、もっと食うべきだろ。

いや、ヘラクレスの手がでかいのか?

凜も驚掴みにしてたし。

そんなことを思いながら、クリスを肩に乗せた。

可愛い子に乗せておけば、きつと怖がられることはないはずだ。

「……ねえ、恥ずかしいんだけど」

「■■■■」

声を上げて、サムズアップする。

「君、とにかくサムズアップしとけば良いとか思ってたそうだよね」

クリスの言葉に笑みを浮かべる。

「笑つても誤魔化されないよ! っていうか、おろして!」

「……………」

「じゃあ自分で降りる」

させません。

がしつと足を掴む。

「……………」

「……………」

無言だが視線が言っている!

今直ぐこの手を離しておろせと!

だが、断るう!

クリスが言っていた仲良くなるための第一歩だ!

と言う訳で諦メロン!

「……ねえ、手を離して?」

うーん、何を言ってるかわかんないなあ。

「聞こえないふりするなー!! さっきまで普通に反応してたじゃん
!」

再び笑みを浮かべてサムズアップ!

「だからそれじゃ誤魔化されないから!!」

「……なんか、凄く楽しそう……私も乗っていいかな」

「リーン!? 正気かお前!」

お、良かったじゃん、クリス。

仲間が増えたぜ!

俺の方へお一人様ご招待!

「なに笑ってるの……って、ちよつとまって!!」

「ふえ!? ちよつ!」

「あ……これ、聞かれてたな」

「おおおおおう! テテテメエ!! デカデカイからってちよ、調子

のるんんやねえぞ!!」

「ビビりまくりじゃねえか」

リーンと呼ばれている女の子を、クリスと同じように……驚掴みは……初対面だし可哀想だから、ちよつと丁寧に抱き上げて肩に座らせた。

「……ねえ、あたしとその子の扱いが大分違ったことについて聞きたいんだけど」

右肩でクリスが何か言ってるが、まずは固まってるリーンと言う子に顔を向けて、笑顔でサムズアップ。

両肩に花だぜ!

「あ、うん」

同じようにポケツとしてたものの、同じようにサムズアップを返してくれた。

うんうん、ノリがいい子だね!

クリスもう少しノった方が良いと思うぜ!

あと今気が付いたんだけど、リーンって子尻尾生えてる!!

クリスにも生えないかな!?

その辺の猫と合体したら生えないかな!?

異世界なら合体もありっしょ!?

そう思っただクリスを見ると、頭をバシバシと叩かれた。

全く痛くない。

「君は今何考えた!?! ねえ! 今とつても失礼なこと考えたでしょ!?!」

「フッフ、凄く仲がいいのね。貴方達」

お、そう見える?

そうだと嬉しいぜ!

なにせ俺はクリスの事大事な友達だと思ってるからな!

だが、それを直接言われると照れるってもんだぜお嬢さん!

「■■■■」

「ちよ! 右手で頭を掻こうとするな!」

おっと、ついつい。

ごめんねクリス!

「……俺達空気じゃね?」

「言うな」

しばらくじやれてたら、ルナさんに掲示板の前で遊ばないって怒られたので、解散となった。

「じゃーな、巨人」

「よかったら今度一緒に依頼受けようぜ」

「喋れないけど、面白い奴だなお前」

「バイバイ」

なんだかんだで楽しかったらしく、四人とも笑いながら声を掛けてくれた。

「迷惑かけて悪かったね」

「■■■■」

クリスは苦笑しながら、俺は声を上げて笑顔でサムズアップした。

そしたら、四人は笑いながら俺にサムズアップを返してくれた。

なんだかすぐ嬉しくなるね!

この調子でサムズアップが流行ると面白いな!

そんなことを考えながら依頼を持って受付へと向かう四人を見送った。

「さて、色々と言いたいことがあるけど……」

ジロリと俺を見るクリスに何か悪いことしたんだろうかと首を傾げた。

すると、クリスは呆れたように溜息をついた。

「もういいや、さ、あたしたちも依頼探さない」と

「■■■■」

未だに肩に乗せられているクリスをそのままに依頼をみる。

「……あたしが見えないんだけど」

確かに……仕方ないので、太腿の上に移動させた。

「……………?」

これでいいでしょ?

「あ、うん。そうだね、おろすっていう選択肢はなかったんだね」

何やら諦めた表情で、依頼に目を向けるクリスに何が悪かったのだろうかと首を傾げた。

「なんか、君ならあたしの助けがなくてもやっていける気がするよ」

まあ、やっていけるだろうけど、せつかく仲良くなったのにそれは嫌だ!

俺はクリスと離れたくないぜ!

と言う事はサムズアップだけでは誤解させかねないので、クリスを掴んでいる手に少しだけ力を込めた。

俺はお前を手放さないぜ! 的な。

「? どうかした?」

どうやら俺の意思は通じなかったようだ。

っていうか、首を横に振ればいいじゃないか!

やっていけないって感じになるけど、それでも一緒に良いからね!

と言う訳で首を横に振った。

「そう? ほら、しつかりと依頼探さないと!」

あれ、なんか話が終わった。

何故に?

少し考えて、思わず頭を押さえた。

俺、頭までバーサーカーになってるんだろうか。

どうかした？の後に首を横に振れば、何でもないよってことになるじゃん！

「さっきからどうしたのさ？　もしかして具合が悪い？　今日はクエストやめとく？」

「■■■■」

俺はクリスの言葉に首を横に振った。
すぎたことはもういいや。

思考までバーサーカー仕様になるかはわかんないけど、少なくとも普通に考えられてる、今回はうっかりしたただけだな！

「それなら、ほら、これなんてどうかな？」

クリスが見せてくれたのは、土木作業の手伝い。

これならヘラクレスのステータスをがつつりと利用できるな！

「よし、それじゃあこれにしようか！」

俺は頷いて、クリスを再び肩へ移動させて、梁に頭をぶつけない様に移動した。

「……もしかして、乗せて歩くの楽しくなった？」

俺はクリスの言葉に笑顔でサムズアップした。

と言う訳でやってきた建設現場で、俺はひたすらに資材を運んで積み上げていた。

身長がかなり高いし、力もあるから二軒屋の屋根以外なら一人で組み立てれるな！

「大きな体だと都合がいいだろうと思っただけど、これは予想外……なんか、あたしがあまり働いてないみたいになってきた……」

クリスが何やら項垂れている。

もしかして疲れたのだろうか？

周りを見渡すと、俺が組み立てた梁の上を歩く大工が。

あれならクリスも軽々とできそうだな。

クリスの傍に行つて、肩を叩いた。

「うん？　どうしたの？　あ、ちよつと!!」

クリスが運んでいた資材を奪って、資材を指さして、自分の胸をど

んと叩いた。

「任せろって事？」

その言葉にうんうんと頷いた。

「そしたらあたしはどうするのさ？」

俺は即座に大工を指さした。

「……なるほど、確かに身軽に動くならあつちが良いかも？」

少し考えてから、クリスは頷いた。

「ちよつと親方と話してくるよ。大丈夫だと思うけど、君も資材で怪我しないよう気を付けてね？」

「■■■■」

今こそこの時！

俺は笑顔でサムズアップした！

そんな俺がおかしかったのか、クリスはカラカラと笑った。

「うん、じゃあいつてくるよ」

そう言いながらクリスは、笑顔で俺にサムズアップしてくれた！

うんうん、良いね！

広がれサムズアップの輪！

そんなこんなで一日の仕事が終わったので、酒場にて打ち上げである。

皆は椅子に座って、俺は地面に座って乾杯である。

「ハツハツハツハ！ まさか一日で基礎工事がほとんど終わるとは思わなかったぞ！ やるなあ巨人の兄ちゃん！」

「ホントすげえよな！ 俺達は何日もかけて運ぶ資材もあつという間に運んじまったし！ っていうか、馬車いらずってすげえな！」

「工事が早く終われば、その分休みが増えるぞお前ら！ 巨人の兄ちゃんに感謝しとけ！」

「うおおお!! 巨人の兄ちゃんありがとよ!!」

「巨人の兄ちゃん！ 明日も頼めるか!？」

「今日は俺が奢るぜ！ だから明日も来いよ！」

俺、大人気!!

これはクリスの言う最初の目的は達成できたんじゃないかね!? 笑みを浮かべながらクリスを振り返ると、膝を抱えて影を背負ってた。

「……あたしもがんばったんだけどなあ……」

クリスには感謝してるよ!

クリスのお蔭でこうして親方たちと仲良くなれたからね!

だからとりあえず元気出せ!

謎の飲み物シユワシユワを差し出して、サムズアップした。

「……うん」

相変わらず元気がないが、小さく微笑んで俺からシユワシユワを受け取ってチビチビと飲み始めた。

なんか元気ないので、クリスを掴んで太腿に乗せた。

俺は親方たちを見て、クリスを指さした。

親方たちは笑顔でサムズアップして、任せろとばかりに自分の胸を叩いた。

「その坊主も細いのによく頑張ったな!」

「身軽だし、高所の作業も早かったな! 流石巨人の兄ちゃんの仲間だな!」

「いやいや、力も中々あったぞ? 流石冒険者だな!」

……あれ?

親方たちクリスの事、男と思ってる?

クリスを見るとプルプルと震えてた。

若干涙目だ。

確かに、クリスの胸はささやかだけど、顔は美少女じゃん。

親方たち……女の価値は胸の大きさじゃないんだよ!!

仲間が誤解されるのは納得いかない。

なので、力をかなり抑えて全員の頭を小突いた。

「いて!? なにすんだよ、巨人の兄ちゃん」

俺は親方たちに向かって腕を組んで、不満を訴えるポーズをした。

「ん? なんだよ?」

どうやらわからないようなので、クリスを抱き上げて目の前に突き

出す。

「ちよっ?!? な、なに?!? なんなのさ?!?」

クリスが慌てるが、これだけ近くで見れば親方たちだっけ気付くだろう。

「なんなんだよ……?」

わからなかったらしい。

この世界は貧乳に厳しいのだろうか?

仕方ないので、最終手段でクリスの胸を指さした。

「ちよ?!? な、なにするつもり?!?」

クリスは胸を触られると思ったのか、胸を隠した。

失礼な!

許可もなく胸を触るようなことなんてせんわ!

許可があつたら触るけどね!

俺も男だし!

そんなことを思いつつも、これならわかるだろ!

「なんだ坊主、男のくせになに恥ずかしがつて……?」

親方の言葉に俺は即座に首を横に振った。

「あ、い、良いから!.. な、慣れてるから大丈夫だよ!」

クリスはどうやら俺が何を訴えているかわかつたらしく、気にしない様に言ってきた。

が、さつきも思ったが俺としては、友人が誤解されたままなのは許せん。

……いや、むしろ勘違いされるくらいの貧乳を認識させる方が酷いのだろうか?

だがしかし、もうすでに遅い。

親方は目を見開いて、驚愕を露わにしていた。

「ぼ、坊主……いや、お前は……女、なのか?」

「「え?!?」」

クリスの顔を見ると、顔を赤くして涙目になった。

……あれ、やっぱりこれって公開処刑?

よくよく考えれば、女のセックスアピールって胸だよな。

これが男なら公共の場で、こいつの短○なんだぜ！つて暴露してるもんだよね？

……俺ってこんなデリカシーなかったか!?

マジで脳みそまでバーサーカー化してねえか!?

と、とにかく今はここから離れることが先決だ!

クリスの手にあるジョッキをテーブルに置いて、クリスを抱き上げて酒場から逃げ出した。

猛ダツシユで馬小屋まで逃げてきて、現在の俺はクリスに頭を下げてる。

ヘラクレスの姿で土下座って……と思わないでもないが、女性を辱めたのだ。

むしろこれでは足りないくらいである。

焼き土下座くらいはしないといけないかもしれない。

そんなことを考えていると、クリスのため息が聞こえた。

「もういいよ……ほら、頭をあげて」

クリスの言葉に恐る恐ると顔を上げてクリスを見下ろすと、何故か慈愛に満ちた目で俺を見ていた。

「あたしが男と間違われてる事が許せなかったんだよね？」

「……」

正座したままで頷いた。

「もうちょっと別の方法があるでしょって思いもしたけど……まあ、嬉しかったから、今回だけ許してあげる」

今回だけだからねといつて笑みを浮かべるクリスに、息をついた。

「次からは自分で言うから、君は気にしなくていいからね？」

クリスの言葉に頷く。

いや、ほんとすいませんでした!

やっぱり思考鈍ってきてんのかなあ……??

グヌヌヌ、バカになってます!

大至急俺の知力をブーストして!

「じゃ、明日もう一回土木作業手伝おうね」

「■■■■」

……知力も大事だけど、明日の事がもっと大事だよね！
クリスの言葉に頷いていると、クウという小さな音が聞こえた。
クリスを見ると、おなかを抑えて顔を赤くしている。
そういえば、しっかりと食べる前に出てきちやつたな。
まあ、聞こえてしまったものは仕方ない。
酒場に戻って飯を食おう。

「えっ？」

ひよいとクリスを持ち上げて、肩に乗せる。

いざ、酒場へ！

「ま、まって！もしかして酒場に戻るつもり!? あんなことがあつた後で!? ま、まって！他の所!! 他の所いこう!! ねえちよつと!? 聞いている!? ねえつてばーん!!!」

やっぱりクリスといると凄く楽しいぜ!!

アクセルの巨人と幸運の女神

俺の朝は早い。

日が出る前に馬小屋の管理人さんが作ってくれたテントを出て、朝の準備を終わらせる。

特注した服から白い一枚の大きな布と赤い布を選んで身に纏う。そして特注のベルトを腰に巻く。

そうすると何という事でしよう！

まるで古代ギリシヤ人が出来上がったではないですか!?

まあ、ヘラクレスって古代ギリシヤ人だけどね！

あれ？ ちがったつけ？

そんなどうでも良い事を考えつつ軽く柔軟体操。

起きてきた馬小屋の管理人さんに挨拶をして、仕事を手伝う。

これは俺の為に態々テントを作ってくれた管理人さんへの感謝の気持ちだ。

俺の身体能力なら、力仕事も簡単なもんだ。

「いつもすまんのう。ワシがした事なんてテントを用意したぐらいだっというのに」

「■■■■」

言葉にならない声で相槌をうって、首を横に振る。

俺が寝転がっても大丈夫なくらい大きなテントなんて、そう簡単に用意できるはずがない。

この管理人のお爺ちゃんが馬小屋生活5日目に持ってきてくれたのだ。

お金があっても宿に寝泊まりできない俺からしたら、大恩あるお方だ。

恩には報いるのは当然の事である。

むしろ朝だけしか手伝いできないことが申し訳ない。

「しかし凄い筋肉じゃな。ワシもまだまだ現役じゃが、お主の体には負けるわ」

カッカカカと楽しそうに笑いながら上半身を開けさせて、俺と同じ

ように藁束などを運び始める。

このお爺ちゃん、御年80歳なのに前世の俺よりも凄い体してるよ。

ヘラクレスほどの筋肉じゃないけど、シュツとしたスマートな筋肉だ。

きっと若い頃は細マッチョでさぞかしモテただろうな。

お爺さんとコミュニケーションを取って、俺は朝の仕事を終え、ギルドへと向かう。

ギルドに向かう頃には既に、町の人たちは活動を始めている。

魔王軍の脅威にさらされているはずの町は、どこまでも活気づいてる。

そんな街を歩いていると、俺は必ず声を掛けられる。

「おーい！ 巨人の兄ちゃん！ ちょうど出来立ての飯があるぞ!! 食ってけよ！」

「お兄さん今日も元気そうだねえ！ 今日も一日頑張りなよ！」

「あ！ 巨人のお兄ちゃんだ！ おはよう！」

「おはよう！ 巨人の兄ちゃん！ 今日も肩車してくれよ！」

「巨人の兄さん！ 今度一緒に討伐に行きませんか!？」

とまあ、大人気である。

巨人と呼ばれているのは、俺が名前を言えないから見た目で呼び名が定着した。

「■■■■」

そんな彼らに笑みを浮かべて声を返しながらも不思議に思う。

ヘラクレスの外見ってかなり威圧感があって怖いと思うんだけど、冒険者や屋台のおっちゃん達に限らず、子供達にも何故か大人気です。

屋台のおっちゃんとかはお金を落としていくことを期待しているから、わかるのだが子供達はわからんとです。

まあ、俺もこの町に馴染んできたと言う訳だ。

俺を手助けしてくれていたクリスは、今はダクネスと言う金髪の少女と一緒にクエストを受けている。

というか、元々そちらとクエストを受けていたが、神託を受けてしばらく俺を手助けしてくれていたらしい。

近い内に一緒にクエストに行こうと言う事になっているので、実に楽しみだ。

そんなことを考えつつ、クエストに誘ってくれた女の子にサムズアップして頷いておく。

弟の為に頑張っているお姉さんな彼女の力になれるなら、ヘラクレスだって喜んで協力してくれることだろう。

しかし、ノートとペンを用意できなかったことが本当に悔やまれる。

ヘラクレスが使えるサイズの筆記用具は流石に無理があつたらしく、雑貨屋、道具屋、魔道店の店主に謝られてしまった。

まあ、ヘラクレスが満足に使える筆記用具っていったら、テレビCMで見るとような大きな紙と筆が必要になるからね、仕方ないです、うん。

ギルドについた俺は、依頼掲示板の前に座り込んで依頼を見る。

そうしていると、ルナと言う受付嬢さんが近づいてきた。

ルナさんは、クリスが居ない時には態々付き添ってくれるのだ。

俺が剥がそうとすると破れてしまう+掲示板を壊してしまう可能性があるから、こうして毎回付き添ってくれている彼女には感謝している。

「今日は土木工事の親方さんから指名依頼が来てますよ。強制ではないですが、どうしますか？」

親方が俺を呼んでいるのか。

なら行くしかないだろう。

ルナさんに向けてグツとサムズアップすると、綺麗に笑ってくれた。

「では、親方さんの依頼を受けるんですね？」

こうして確認を取るのは、YES、NOで返答ができるからだ。

態々俺の為にこうして分かりやすくしてくれることが凄く嬉しい

「■■■■■」
迷惑料だからね！ 遠慮なく受け取ってください！

「まあ、そんなお主じゃから皆、お主向けのサービスを始めておるから
のう」

あ、そうなんだ？

でも俺としては大助かりなので、そういう所にはたくさんお金落とすよ！

もうアクセルから離れるつもりないからね！

この世界に転生して早数月、既にこの町に永住するつもりで俺であつた！

家を建てるための資金はまだまだ足りないけどね！

俺が普通に生活できる家っていったら結構なお金が必要なのです、世知辛い。

床板にしたって普通の倍以上の厚さが必要だからね……うん……。考えるとブルーになってきた。

まあ、英雄ボデイのおかげで家がなくなつて平気なんですけどねー……でもやっぱり家に住みたいよね。

「あ、ようやく戻ってきた……ってなんでしよげてんのさ？」

「■■■■■」
馬小屋のテントに戻ると、俺専用の羽毛ベットに埋もれているクリスがいた。

今日の帰りは早かったようだ。

なんでもないと首を横に振ってからクリスの隣に倒れ込む。

コカトリス10匹分の羽毛でできたベットが思いつきりたわんだ。

「わきやあー!」

その反動でクリスがベットから軽く射出された。

ベットの外側へ落ちそうだったクリスを受け止めてベットに戻す。

「びっくりしたあ……もう、気をつけてよねー!」

ペしペしと俺を叩かくクリスに笑みをこぼす。

今日もクリスはかわいいな!

「いえ、罰するほどのことじゃないですからね!?! あっ」

なんかアクア様とエリス様の聞こえた気がする。

アクア様、それは流石に人としてどうかと思います。

エリス様、慰めてくれてありがとうございます……って、なんか近くから声が聞こえた気がする？

顔を上げると何やら焦った顔をしたクリスが。

「■■■■?」

「な、なんです……んっ!?! なんだい?」

んんー? なんかクリスの後ろにクリスに似た髪の毛の長い女性が見える。

じつと見てると、何やら焦っているご様子。

もしかしてあれがエリス様なんだろうか?

なんか凄いクリスに似てる……はっ!?! ま、まさかクリスは……!?!

俺はあまりの驚きに目を見開いた。

震える手でクリスを指さすと、クリスは困ったように頬をかいた。

「これは、流石に誤魔化せないかな……?」

あははと困ったように笑うクリスの様子に、俺は自分の考えが間違いでないことを悟った。

まさか、クリスがそんな方だったとは思わなかった……

「■■■■」

「やっぱり気付いたみたいだね」

どうやらクリスは俺の心を読んだみたいだ。

クリスの背後に浮かんでいるエリス様も困ったように笑っている。

「バレちゃったものは仕方ないね……そうだよ、君が察した通り私は……」

エリス様……クリスは……女神エリスの巫女だったのか!!

「そう、私は女神エリスです……え?」

え?!

「え!?! ちょ、ちょっとまって!?! 今、君なんて思った!?! ちょっと私に意識を向けて祈ってみて!?!」

え？ エリス様じゃなくクリスに祈るの？ っていうか、クリス、自分が女神エリスだつて言わなかった？

「……………」

「……なんかめっちゃ汗かいてるね、クリス？

「そ、そんなことないよ？」

「なんで俺が考えてることがわかるんですかね。」

「……は、ハメラれた!?!」

「流石にここまでボロを出せば、馬鹿になった俺でも気づきますよ？」

「っていうか、思いつきり自分の正体言ってたじゃないですか、エリス様。」